

# 笑顔のために



一心不乱にテグスにビーズを通す子供たち

## ダナン枯葉剤被害障がい児・者支援

私はダナン市枯葉剤被害者協会(通称VAVA)の運営する障がい者施設でボランティアをしています。

配属される前は、この施設に障がいのある子どもたちが通い、勉強やリハビリをしていると聞いていました。しかし、配属されてから、何日たっても子どもたちが何か活動をしている様子がありませんでした。先生たちも何か教えることもありません。朝来所して、夕方帰っていただけ…。ここはどういった役割の施設なのだろうか、私はここで何をしたらよいのだろうかと悩みました。

施設にはミシンや、線香づくりのための機械など、子どもたちのリハビリや活動に使えそうな物はあるのですが、まったく活かされていませんでした。

毎日通ってくるのは大体40人前後、基本的に子どもですが、7歳から上は40代まで幅広く、障がいの様々です。その大多数はひとつの教室に集まり、絵をかいたり、友達と遊びまわっていたりしますが、中には一日中椅子に座ったまま動かない子もいます。しばらくは施設の実態を把握するため、子どもたちとの関係づくりをしながら観察をしてきました。

徐々にわかってきたのは、ここは日本というデイサービスセンターのような役割で、日中、家族が仕事に出られるように子どもを預かっており、それが第一目的であること。先生たちが障がいに対して、知識のない素人ばかりで、どのように子どもたちと活動をすればいいかを知らないこと。また、センターに通っている子たちは、学



校に行けない=障がいの重い子たちばかりであると、先生たちが思い込んでしまっていること。先生たちは何もしないのではなく、どうしていいのかわからないだけなのだ、ということ。さらにこの施設は無料で利用できる一方、自給自足と寄付で成り立っているため、先生たちが資金繰りのために子どもと徹底的に向き合う時間がとれないこと…。実態が分かってくるにつれ、日本との環境や障がいに対する考え方の違いを痛感しました。

施設の子どもたちは、障がいの程度が重くて学校に通えないからここに来ていると先生たちは言うのですが、実際はほぼ自分のことは自分でできる子たちしか通っていないので、程度で言えば「軽い」子たちが多いのです。

当初は、いくつか改善や、活動の提案を試しましたが、答えは「この子たちはわからないから無理だよ」というものでした。そこで考えたのが、先生たちの考え方を变えるのではなく、子どもたちは実はこんなに能力が高いのだ、ということを見つけてもらおうという作戦です。

活動の第一歩として始めたのが、ビーズで花を作ることでした。元々センターには

道具が揃っており、すぐに始められる状態でした。ただ、誰も管理をしていないので、本来一色ずつ色分けされているはずのビーズが、子どものいたずらで全色混ぜられてしまっていました。そこでまず、色分けから始めました。

私がビーズの色分けを始めると、すぐに興味を持った子どもたちが集まってきました。それからは毎日コツコツと色分け作業を続けました。子どもたちの能力は私の想像をも超えるものでした。色分けが終わると、実際にビーズで花を作る工程を全て子どもたちだけでやり遂げたのです。もちろん私も子どもたちが分かるように図解で示したり、見本を作ったりいろいろ工夫はしましたが、子どもたちは「毎日練習する!」とよく頑張ってくれました。不器用な方だとギブアップしてしまいそうな細かい作業にも関わらず、どんどんクオリティーが上がっています。

それを見て、先生たちも「すごい、すごい」と子どもたちを褒めてくれるようになりました。褒められることや成功体験が子どもたちのモチベーションにつながっています。

ここでの子どもたちの生活が充実するよう、さらに子どもが活躍できる場を作っていきたいと思います。

### ●プロフィール

野々山 直世 (ののやまのふよ)

岐阜県出身。日本では障がい者の在宅介護、就労支援、知的障害者のホームなどで約10年勤務。現在青年海外協力隊としてダナン市枯葉剤被害者紹介の運営するセンターで活動中。

